

第17回国際エチオピア学会

学術大会

吉田早悠里

第17回国際エチオピア学会学術大会が、2009年11月1日から11月5日にかけてエチオピア・アディスアベバ大学にて開催された。2008年11月に学会開催が公示され、世界中から350人以上が参加し、280人以上が日頃の研究成果を発表した。発表プログラムでは、日本からの参加・発表者は12人であったが、4名の参加キャンセルが出たため、個人発表を行った参加者は板垣順平(大阪芸術大学)、伊藤義将(京都大学)、乾秀行(山口大学)、大場千景(総合研究大学院大学)、金子守恵(京都大学)、重田眞義(京都大学)、藤本武(人間環境大学)、吉田の計8名(順序不同)であった。参加者全体における日本からの参加者の比率は少なかったが、いずれの発表も好評で大会で存在感を放っていた。また、キャンセルされた発表を心待ちにしていた参加者も多く、日本からの参加者の少なさを残念がる声も多かった。

11月1日13時からアディスアベバ大学エチオピア研究所で参加受付が行われた。大会の会場は、首都アディスアベバの南約20キロメートルの位置にあるアカキキャンパスで

あった。大会初日の2日は、9時からオープニングセッションが開かれ、アディスアベバ大学エチオピア研究所長エリザベス・ウォルデギオルギス氏、文化観光庁モハンメド・ドリル氏、アディスアベバ大学長エンドリアス・イシェトゥ氏、リチャード・パンカースト氏、外務省セユーム・メスフィン氏が講演した。10時30分から11時30分にかけては、第16回国際エチオピア学会学術大会の際に参加者を魅了したノルウェーのバンドが招待され、エチオピアの音楽とジャズのセッションとダンスが披露され、会場は盛り上がった。また、テレビ局も撮影に訪れ、エチオピア研究所長エリザ





ベス氏がインタビューに応える姿もうかがえた。午後からは個人発表が始まり、参加者はそれぞれの研究成果に耳を傾けた。

11月3日から5日にかけての一日の予定は以下のとおりである。朝9時から10時に基調講演が行われ、10時から10時30分は休憩、10時30分から12時30分にかけて個人発表が行われた。12時半から14時は昼食休憩で、毎日の昼食はキャンパス内の食堂にて無料で提供され、インジェラとドロワットをはじめとするエチオピア料理のメニューを日替わりで楽しむことができた。また、午後は14時から15時30分が個人発表、15時30分から16時は休憩、16時から17時30分が個人発表であった。また、最終日の5日は個人発表が15時30分までとなっており、休憩をはさんだ後、16時からビジネスセッションが開かれ、次回第18回の学術大会の開催場所をめぐって議論がなされた。

連日の基調講演について簡単に紹介したい。2日目は、バイエ・イマーム氏がエチオピア言語学における潮流について、ハロルド・フレミング氏が先史学におけるエチオピアの重要性について、ゲブレ・インティソ氏がエチオピアにおけるエチオピア人による人類学の台頭についての講演を行った。3日目は、ユリック・シグベルト氏が、現在編纂が進んでいる「エンサイクロペディア・エチオピカ」の進行状況について報告をした。また、シサイ・アサフア氏が、1959年から2007年の半世紀にわたるエチオピア開発研究について講演した。4日目は、テカリン・ウォルデマリウム氏が

エチオピアの公的・学術的な史料の編集について、ヤコブ・アルサノ氏が植民地時代にエチオピア政府が諸外国と結んだナイル川にまつわる条約についての講演を行った。5日目は、ハプターム・ウォンディム氏がエチオピアにおける教育研究のテーマと潮流について、マーザ・アシェナフィ氏が公的決議における女性の参加について講演した。

個人発表は、人類学、社会、歴史、宗教、言語、考古、法律・政治、開発・環境、教育等の計12分野に及んだ。1人あたりの発表時間は、発表20分、質疑応答10分の合計30分であった。初日の個人発表でパワーポイント用のプロジェクター

が用意されていなかったり、発表途中に停電のために機材が使用できなくなったりする事態も発生したが、特に大きな混乱はなく、大会は順調に進んだ。

パネル・セッションの中でも、最も発表が多かったのは人類・社会学のパネル・セッションで、2部屋で開催された。特に、タダセ・ベリソ氏をはじめ4人の発表者による紛争を扱ったセッションが盛り上がりを見せ、紛争を解決する際に宗教や在来知がどのように活用されているのか、具体的な事例が提示された。また、ニール・ブラッドマン氏を研究代表とする遺伝人類学の発表では、エチオピアにおける民族とその遺伝子の差異に関する発表がなされ、質疑応答の際には質問が途絶えることがなかった。また、プログラムとは別に、5日の午後にはクレシダ・マーカス氏を中心に、エチオピア研究を行う女性研究者によるディスカッションが開かれた。

毎日の大会終了後には、夕食会が開かれた。11月2日は、当初、ナショナルシアターでエチオピアの音楽とダンスが披露される予定であったが、ギルマ・ウォルデギオルギス大統領から招待を受け、シェラトン・ホテルでの夕食会に参加した。11月3日は、シェラトン・ホテルのガスライトにて、エチオピアダンスとジャズのセッションが披露され、参加者は音楽とダンスを楽しんだ。また、4日の晩には、日本大使公邸にて、日本大使館、ドイツ大使館、ノルウェー大使館の主宰による夕食会が開かれた。夕食会では、寿司を代表とする

日本料理が提供されたが、参加者の中には初めて日本料理を口にする者も多く、好評を博していた。最終日の5日には、エチオピア研究所で夕食会が開かれ、参加者は大会最終日の夜を名残を惜しみながら親睦を深め、刺激に満ちた4日間の学術大会は幕を下ろした。

6日にはエクスカージョンが開かれ、約80人が青ナイルを訪れた。また、大会終了後にいくつかの研究会も開かれ、大会終了後も交流を深める者もいた。海外からの参加者の中には、大会終了後もエチオピアに滞在し、短期間の調査に出かける者も多かった。

筆者自身、今回の学会に参加したことによる成果は、当初の予想を遥かに超えるものであり、非常に有意義な経験となった。特に、普段接する機会のない多くの研究者と意見交換や交流の場を持つことができ、貴重な時間を過ごすことができた。

特に、会場がエチオピアであったということから、現地での研究成果の還元について考えさせられた。筆者自身、調査地で「エチオピアの文化や歴史を日本に持って帰ってどうするのか」と質問されることがある。調査地に暮らす人々が学術大会に参加することや論文を読む機会は稀である。だがエチオピアでの学術大会の開催を通して、より身近に研究成果を発表することが、直接的でなくとも何らかの形でエチオピアおよび調査地へ研究成果を還元することにつながるのではないかと期待したい。

また、今回の大会の特徴としてエチオピア人の参加者が多かったことが挙げられる。エチオピアで学術大会が開催されることで、エチオピア国内で学ぶ修士課程のエチオピア人の学生が参加可能であった。特に人類学においては、ゲブレ氏の基調講演でも取り上げられたが、2000年以降、アディスアベバ大学における人類学の修士課程の設置に伴い、エチオピア人による研究も盛んに行われるようになってきている。今回の発表者の中にもエチオピア国内の大学の講師や、修士課程のエチオピア人の学生の姿が目立っていた。彼らの発表には



先行研究の少ない地域における貴重なデータが含まれており、興味をひきつけられた。他方、エチオピア人の学生の中には学術大会での研究発表の経験のない者も多く、自身の発表の訓練の場になっていただけでなく、多くの参加者の発表を聞くことを通して発表の内容から知見を得ながら発表の方法を学ぶ機会にもなっていたようである。彼らの中から、今後のエチオピア研究を担う研究者が登場することに期待したい。また、海外からの参加者の中には、今回の大会を機に初めてエチオピアを訪れたという者もいた。彼らの中には、大会の前後にエチオピア各地を回ってエチオピアを肌で感じることで、自らの研究において新しい着眼点を得たと語る者もいた。

最後に、前回の2007年の第16回国際エチオピア学会学術大会から、わずか2年間の準備期間で今回の大会を成功に導いたアディスアベバ大学エチオピア研究所の方々をはじめ、大会の開催に尽力した多くの方々に感謝の意を記したい。参加者は、アカキキャンパス内に付設されたゲストハウスが提供され無料で宿泊することができたほか、またアディスアベバ市内に宿泊する参加者には市内と会場を往復するシャトルバスが用意されるなど、大会事務局のさまざまな心配りによって、非常に充実した大会になったことは確かである。次回、第18回の学会は3年後の2012年にフランスで開催される予定である。

(よしだ・さゆり／名古屋大学)